

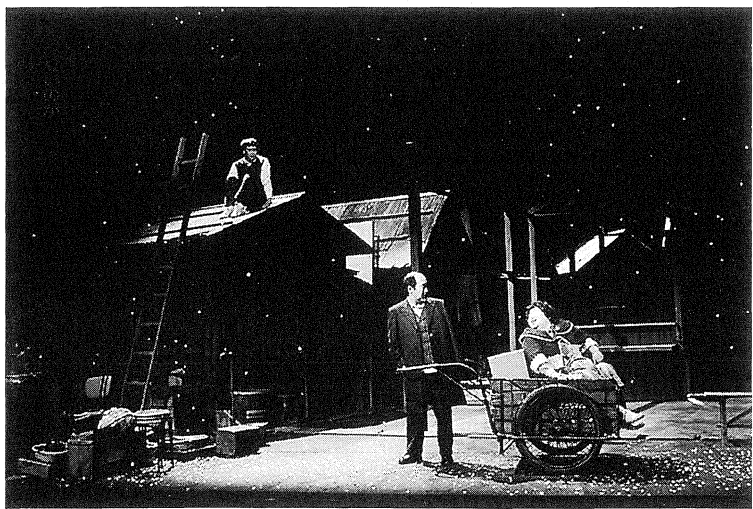
# 日韓合同公演『焼肉ドラゴン』韓国公演初日記

財団法人新国立劇場運営財団

二〇〇八年五月二〇日。ソウル芸術の殿堂「土月劇場」<sup>トッタル</sup>。二年半の準備を費やした、韓国公演の幕が<sup>トッタル</sup>いにあがる。金浦空港から、開演を三時間後に控えた客席に到着したとき、舞台では上気した日韓の俳優たちが最後の稽古に励んでいた。大成功した日本公演の後だけに、全員が韓国の観客にも「最高の芝居を見せる」という意気込みだ。舞台監督から「時間です」の声が入り、全員で気合の掛け声をかけた後、俳優は準備のために楽屋へ戻っていった。楽屋に行くと、お茶や韓国菓子の置いてある机の前の壁に韓国文字がはつてあり、「こんにちは」「私は〇〇です」「トイレはどこ?」などの対訳が付いている。俳優やスタッフに挨拶をした後、ロビーに回ると、五層の回廊中央部にある吹き抜けに『焼肉ドラゴン』の巨大なポスターが飾つてあり、韓国人がその前で楽しそうに記念写真を撮っていた。開演三〇分前、いよいよ開場。切符を持った観客が賑やかに客席を埋めていく。見えづらく売らないことにしていた席に

まで観客が入る。七時三〇分開演。観客席からは冒頭から笑いが起きている。やがて母親役の韓国女優高秀喜<sup>コウスヒ</sup>が地響きを上げて登場する場面で、大爆笑がおきた。観客はのけ反りながら手を叩いて笑っている。俳優も観客の興奮に呼応するように芝居をしている。客席に至福の時が流れる。やがて観客は床を踏み鳴らしながらよろこび始め、劇場内は大興奮のるつぼだ。日本の数十倍反応がいい。一家が離散していく終幕。客席から嗚咽が聞こえてくる。例のない四回のカーテンコールの後、ロビーに出ると、上気した韓国の観客たちが、握手を求めてくる。「カムサハムニダ!」国も民族も年齢も何もかも超え、演劇を通じて一つに結びついた人間同士がそこにいた。握手を交わしながら、合同公演が目指すものが単なる国際交流ではなく、「優れた内容の作品をつくる」という時代が変わったことを実感した。二〇一一年、東京での再演の後、日本各地から韓国国内を巡演する企画がある。遙か未来へと続く日韓公演の歴史

が、今始まった。最後に本公演の実現にかかわってくださったすべての方々に心よりお礼と感謝の言葉をのべさせていただきました。ありがとうございます。そして「カムサハムニダ」。



『焼肉ドラゴン』終幕